

坂本龍一さん 未知の音探す苦しみの先

（NIKKEI The STYLE 2018年のインタビューを再掲）

2023/4/3 14:20 | 日本経済新聞 電子版

坂本龍一さんは2018年、日本経済新聞のインタビューに応じ、自身の人生について語りました。謹んでお悔やみ申し上げ、2018年9月2日付 NIKKEI The STYLE「My Story」の記事を再掲します。



米ニューヨーク・ウエストビルレッジにて（2018年7月）

テクノポップ、民族音楽と電子音楽の融合、人民のための音楽……。音楽家として活躍する坂本龍一さんの底流には不屈の反骨精神がゴロリと横たわっている。「鬼の編集者」と呼ばれた父から託された「人生のバトン」。がんから復帰した今、創造の原点を振り返る。

昔から反骨精神が強かった。

小学校の頃、自宅でピアノを弾きながら、独りで憤慨していたのを覚えている。

「右手に対し、左手が不当におとしめられている。これは平等ではない」

坂本さんは左利きである。

古典のピアノ曲は右手でメロディーを弾き、左手はもっぱら伴奏という形式が多い。「主役は右手ばかり。左手はいつも脇役に追いやられていた。僕は左利きだから、これが納得できなかった。『差別じゃないか』とか言ってね。かなり生意気な子どもでした」

だからバッハが好きになった。

バッハの曲は右手に出てきたメロディーが左手に移ったり、また形を変えて右手に戻ってきたりする。「左右の手が役割を交換し、同等の価値を持ちながら進行するのが良いと思った」

マイノリティーの反発、常識への懷疑……。平等とか、正義には子どものころから人一倍敏感だったという。

学園闘争のリーダー 試験や通信簿を「解体」

高校に入ると学生運動にのめり込むようになった。ベトナム反戦機運の高まりで学園闘争が吹き荒れていた時期だ。ジャズ喫茶に入り浸り、ヘルメット姿でデモや集会に参加した。気が付くと、闘争のリーダー格になっていた。

「学校を解放し、民主化せよ」

高3の秋、学校側に制服制帽、試験、通信簿の廃止など7項目の要求を突き付け、校長室を占拠したことがある。学校制度を「解体」する挑戦だった。闘争は4週間続き、ついに学校側が折れ、要求をのますことに成功する。

音楽に向かう姿勢も「解体」を意識するようになる。音楽好きの母の影響でピアノを習い始め、やがて専門の先生の手で作曲も学び始めた。だが東京芸術大学作曲科に入学する頃には「西洋音楽ではなく、電子音楽と民族音楽を学び倒す」と決めていたそう。

バッハからドビュッシーを経て現代音楽まで西洋音楽を時代の流れに沿って学んできたが、「西洋音楽はすでに袋小路に行き詰まり、その先には何も発展がないように思えた」からだ。

過去を解体し、未知の地平を切り開く。テクノポップ、民族音楽と電子音楽の融合、人民のための音楽……。後に世界的な音楽家として活躍する下地がこうして形作られてゆく。

少即是多

less is more

Yann Tiersen

反骨心、そして創造への執念を受け継いだのは、おそらく父親からだろう。

音楽とは全く無縁の人である。

坂本一亀。旧河出書房「文藝」の編集長を務め、日本の戦後文学界の礎を築いた伝説の編集者だった。三島由紀夫の「仮面の告白」、野間宏の「真空地帯」、高橋和巳の「悲の器」など多数の名作を世に送り出したことで知られる。

苛烈な人生の陰には、癒えることのない苦悩があった。学徒出陣で通信隊員として満州に送られ、「潔く死ぬ」との決意で任務に励んだ日々。だが本土決戦に備えて通信隊員だけが終戦直前に帰国。幸か不幸か、命拾いする。

苦楽を共にした多くの戦友が荒野に倒れ、シベリアの強制労働に苦しんでいるのに自分だけが助かってしまった罪悪感……。そんな「どん底の虚無」が新人作家の発掘に駆り立てた。

「バカヤロー、妥協するな」。作家を次々に怒鳴りつけ、何度も原稿を書き直させたのは有名な逸話だ。「怖くて目もろくに合わせられなかった」。父は多くを語らなかったが、戦後日本の文学界に貢献することで自分なりに罪滅ぼしをしようとしたのではないか。



少年時代のこんな情景を思い出す。東京に珍しく雪が降った日。突然、父から「表に出ろ」と木刀を手渡された。「かかってこい」という。寒稽古だった。「唐突で驚いたが、あれは何だったのか……。僕が情けない人間にならないように根性を鍛え直そうとしたのかな」

「人生のバトン」「男のバトン」を受け取った——。そんな感触がある。

坂本さんが世界的な名声を得た後も、父は「奇抜な格好をするな」「音楽で勝負しろ」などと叱り続けたそうだ。

死を意識した治療後 「音が違って聞こえた」

自分の「死」を初めて意識したのは2014年6月末のことだ。喉の調子が悪いので検査を受けたら突然、中咽頭がんだと宣告された。激痛を伴う3カ月の集中治療に歯を食いしばって耐え、がん細胞の恐怖と向き合った。

「何とか生き延びた」と悟った時、音がまるで違って聞こえたという。もの自体が持つ音の響きに関心が向かっていた。ドラやシンバルを弓でこすり、瓶やバケツを棒でたたく。「楽器だってももとは鉱物や木でしょう。ものの音として捉え直すと発見がある」

バーンと鳴り響いたシンバルの音が逡巡しながら静寂の間に消えてゆく。その音に自身の人生を重ねてみる。生死をつなぐ輪廻（りんね）の世界……。永遠の音への憧れがあるのかもしれない。



ニューヨークの工房には、宙に浮かぶオブジェのような鉄板、火箸やヒシャクが屏風や生け花のように並ぶ風変わりな音響装置などが雑然と置いてある。まるで理科の実験室のようだ。

父も母もすでに亡くなった。自分に残された時間は確実に減っている。「恥ずかしくないものを残しておきたい。いつ逝ってもいいように……」。長年、座右の銘にしてきた「Less is more」が重みを増したように感じる。

昨年、自ら出演したドキュメンタリー映画「CODA」が公開された。「最終楽章」という意味だ。「人生の最期みたいで嫌だった」というが、未知の地平に進む前向きな覚悟を示したのだろう。



その映画に撮影監督として参加したのが一番末の息子。米国の大学で哲学と映画を学び、現在は映像作家として活動している。「なぜか父によく似ていてね。僕がヘラヘラしていると『しっかりしろ』なんて怒られるんだ。隔世遺伝かな」と照れ笑いを浮かべる。

「頂に登ると、次の山が見えてくる。まだ聞いたことがない音を聞いてみたい」。次は「時間」をテーマにしたオペラ制作に取り組むという。

小林明

田中克佳撮影

さかもと・りゅういち 1952年東京都生まれ。東京芸術大学大学院修了。78年音楽ユニット「YMO」を結成。「戦場のメリークリスマス」で映画に初出演し音楽も担当、「ラストエンペラー」でアカデミー賞作曲賞を受賞。